

### III. 研究ノート

## 群馬県吾妻郡長野原町林地区出土「三家」墨書土器をめぐる —6世紀から7世紀の吾妻地域の動向に着目して—

高橋 人 夢

#### はじめに

群馬県北西部の吾妻郡に属する長野原町では、1994年から2019年にかけてハッ場ダム建設に伴い、調査面積約100万㎡に及ぶ大規模な発掘調査が実施された。その結果、縄文時代から古代・中近世にわたる山間部集落が数多く発見され、主に平安時代に属する古代集落の発掘調査事例も格段に増加したことにより、これまで不明瞭であった古代上野国吾妻郡の歴史的特質、あるいは山間部の集落遺跡の実態を明らかにする緒に着いたのではないと思われる。

古代吾妻郡は長田・伊参・大田の3郷からなる小郡である。既知の古代吾妻郡に関わる文献史料は僅少であるものの、上信自動車道やハッ場ダム建設に伴う大規模発掘調査事例が増加したことにより、当地域における近年の墨書・刻書土器の出土事例は目覚ましいものがある。これらの資料を集成し古代吾妻郡の動向を考察した高島英之氏によると、2021年3月現在において吾妻郡内に所在する遺跡から出土した墨書・刻書土器は、18遺跡198点に及ぶという〔高島2021〕。なお高島氏のご教示によると、2023年8月現在、その数は22遺跡306点に及ぶ。未報告などのため収載されていない資料もあるため、実際にはこれ以上の遺跡数・点数があるとみてよからう。

これらの資料はこれまで文献史料が知られていない当地域の信仰形態、在地氏族、在地経営を窺い知るにあたって魅力的なものばかりであるが、そうした資料のなかで一際注目されるものが、長野原町林地区の楡木Ⅱ遺跡出土の「三家」、およびこれに類するものが記入された墨書土器である（以後、これらを「三家」関連墨書土器と呼ぶ）。この墨書土器については既に高島氏が詳細に考察を加えており、大化前代にヤマト王権により設置されたミヤケの遺存地名である可能性も含めていくつかの可能性が示されている〔高島2008・2013・2021〕。さらに、高島氏が検討した楡木Ⅱ遺跡出土の墨書土器の他にも同じく林地区に所在する中棚Ⅰ遺跡からも「三家」

と記入された墨書土器が出土しており、長野原町教育委員会が報告している〔長野原町教育委員会2015〕。このように、近接した遺跡から「三家」と記入された墨書土器が出土したことは単なる偶然とは考えられず、大化前代にミヤケが設置されていたことを示唆するものと考えられる。

仮に、墨書土器に記入された「三家」という文字が大化前代に設置されたミヤケを意味するのであれば、当地域の6世紀以降の動向が当然気になるわけであるが、この時期に吾妻地域は飛躍的な展開を遂げる。また後述のとおり、長野原町内で発見された古墳時代に属する遺構は僅少である一方で、検出された古墳時代、とりわけ5世紀後半から6世紀前半に属する遺構が全て林地区から検出されているという点も見逃せない。こうした状況を踏まえ、小稿では、林地区出土「三家」関連墨書土器をめぐる、出土した遺跡やその周辺地域の考察を行うことで、6世紀から7世紀の吾妻地域の動向を明らかにすることを試みる。

#### 1. 長野原町林地区の遺跡と出土した墨書土器について

##### 遺跡の位置と概要

長野原町は群馬県北西部に位置する。本町は高間・白根の両山系と大洞山系とに挟まれた吾妻川流域地帯の北部と、高原地帯の南部とに大別され、高原地帯を除きほとんどが河川・溪沢に向かう山岳傾斜地帯である。町の北西には草津白根山（標高2,170m）、南西には浅間山（標高2,568m）が位置する。町域も北部は高間山（標高1,341m）や王城山（標高1,123m）、吾妻川より南に丸岩（標高1,124m）や菅峰（標高1,473m）など、南部は南東から南にかけて浅間隠山（標高1,756m）、鷹繁山（標高1,431m）、鼻曲山（標高1,655m）など、周囲を1,000m～1,800m級の険しい山々で囲まれている。

長野原町の河川は長野県境の鳥居峠付近（標高1,362m）を水源とする吾妻川が東流し、それに万座川

や熊川・白砂川など主に両岸の山地から発する諸支流が注ぎ、渋川市街地付近で利根川右岸に合流する。吾妻川両岸は河岸段丘が発達しており、段丘面は最上位・上位・中位・下位の4段階で形成されている。

「三家」関連墨書土器が出土した遺跡は町域北部の吾妻川流域帯にあり、吾妻川左岸の河岸段丘上に立地している。遺跡はすべて大字林に所在し、この林地区は王城山南麓に位置している。楡木Ⅱ遺跡は最上位段丘面よりも上に位置し、南に開く緩やかな扇状地形の先端部にある。標高は630～660 mである。調査の結果、平安時代の竪穴建物35棟、竪穴遺構3基などが検出された。中棚Ⅰ遺跡は上位段丘面上の非常に狭い段丘面上に立地し、東側には最上位段丘面との段丘崖があり、西側には王城山から流れてくる楡木沢がある。標高は599～600 mである。調査の結果、平安時代の竪穴建物4棟などが検出された。

**周辺の古代集落の様相** ここでは、長野原町域における古墳時代から平安時代の遺跡について概要を述べたい。

古墳時代については、ハッ場ダム建設に伴う発掘調査が実施される以前は、遺構外遺物として他時代の遺物に混入するかたちで5世紀後半の土器片が数遺跡で確認されていたものの、長野原町で古墳時代の集落として把握されている遺跡は皆無であった。ところが、近年の調査により僅少なながら5世紀後半から6世紀前半の竪穴建物が発見されている。まず最上位段丘面に立地する林宮原遺跡で5世紀末～6世紀初頭の竪穴建物が1棟検出された。これに続いて川原湯勝沼遺跡で焼土を伴う土坑から同時期の土師器と遺構外で剣形模造品、下原遺跡で同時期の竪穴建物1棟のほか、土師器片がまとまって出土している。また上原Ⅳ遺跡でも5世紀後半～6世紀初頭の竪穴建物が2棟検出されている。これらは吾妻川に直面した最上位・中位段丘面の自然流路あるいはその周辺にまとまって分布している。これら4遺跡で検出された遺構は時期的にほぼ合致している。さらに上原Ⅰ遺跡で前期と考えられる竪穴建物からS字状口縁台付甕や埴形土器が出土し、中期の高坏を包含する土坑も検出され、これまで空白であった時期の遺構検出事例が徐々にではあるが大規模調査の成果として増えてきている。

『群馬県古墳総覧』では大津地区の綜覧長野原町1号古墳（「鉄塚」）と与喜屋地区の綜覧長野原町2号古墳（「五輪塚」）が報告されている〔群馬県教育委員会編2017〕。2号墳は現況で畑としてならされているが、1号墳は円形の形状を保ち、現在は墓地として利用されている。その他、林地区宮原に「てつか（てづか）」や林

地区中棚にある「砂塚」と呼称される塚が存在する。いずれも古墳とするには未だ根拠が薄く、今後の調査に期待したい。

長野原町域における奈良時代に該当する遺跡は分布調査時の羽根尾Ⅱ遺跡のみで増えていない〔長野原町教育委員会編1990〕。これに対して、平安時代、なかでも9世紀中葉・後半から10世紀前半にかけての集落の分布は町内全域に及んでおり、縄文時代とともに本町で原始古代の中心をなす時期である。代表的な遺跡として、西部地区では赤羽根遺跡・向原遺跡、東部地区では長野原一本松遺跡・尾坂遺跡・横壁中村遺跡・楡木Ⅱ遺跡・中棚Ⅰ遺跡・中棚Ⅱ遺跡・林宮原遺跡・下田遺跡・上原Ⅰ遺跡・上原Ⅲ遺跡・石川原遺跡・上ノ平Ⅰ遺跡などが挙げられ、これらの遺跡から竪穴建物・掘立柱建物・陥し穴・鍛冶遺構などが検出され、当該期集落として把握されている。このなかで楡木Ⅱ遺跡では竪穴建物35棟、上ノ平Ⅰ遺跡では竪穴建物が32棟検出され、後者からは県内2例目となる皇朝十二銭「貞観永宝」が出土している。これらの遺跡は吾妻川左岸側における中心的な集落として機能していたと考えられる。一方、右岸側では、石川原遺跡が9世紀以降60棟を超える竪穴建物を擁する、西吾妻地域のなかでも大規模な集落であることが明らかとなった。石川原遺跡では10世紀後半でも5棟程度の竪穴建物が検出されており、この遺跡のほかに長野原一本松遺跡・横壁中村遺跡では11世紀前半の竪穴建物も発見されているなど、東国平野部の古代集落とは性格を異にしている。このような9世紀後半から10世紀前半における当地域の山間部開発については、『政事要略』貞観4年（862）4月10日太政官符にみえる「上野国吾妻郡擬領外正六位上毛野坂本朝臣直道」（上毛野坂本朝臣氏は石上部君氏からの改姓氏族）や当地域出土の墨書土器から碓氷・甘楽・多胡郡周辺の石上氏・石上部氏及びその同族の物部氏の進出を想定する必要があるであろう〔関口2013〕・〔高島2021〕。当地域は上野国から鳥居峠を経て信濃国へ至る交通路上に位置しており、全時代を通して交通の盛んな地域である。畿内から東国へ至る最重要ルートである碓氷峠を要する碓氷郡の郡領氏族の同族を吾妻地域に配置していることから、当地域が王権に重視されていたことが示唆される。

遺物に関しては、町域では小型ロクロ甕や黒色土器、苧引金具など長野県域との交流を示唆する遺物が発見されており関心を覚える〔富田2011〕・〔高林2015〕。竪穴建物の構造についても東南隅・南壁にカマドを構築する点が興味深い。また長煙道型石組カマドの検出例の多さは特徴的で、これらのカマドが多くみられる東北地域

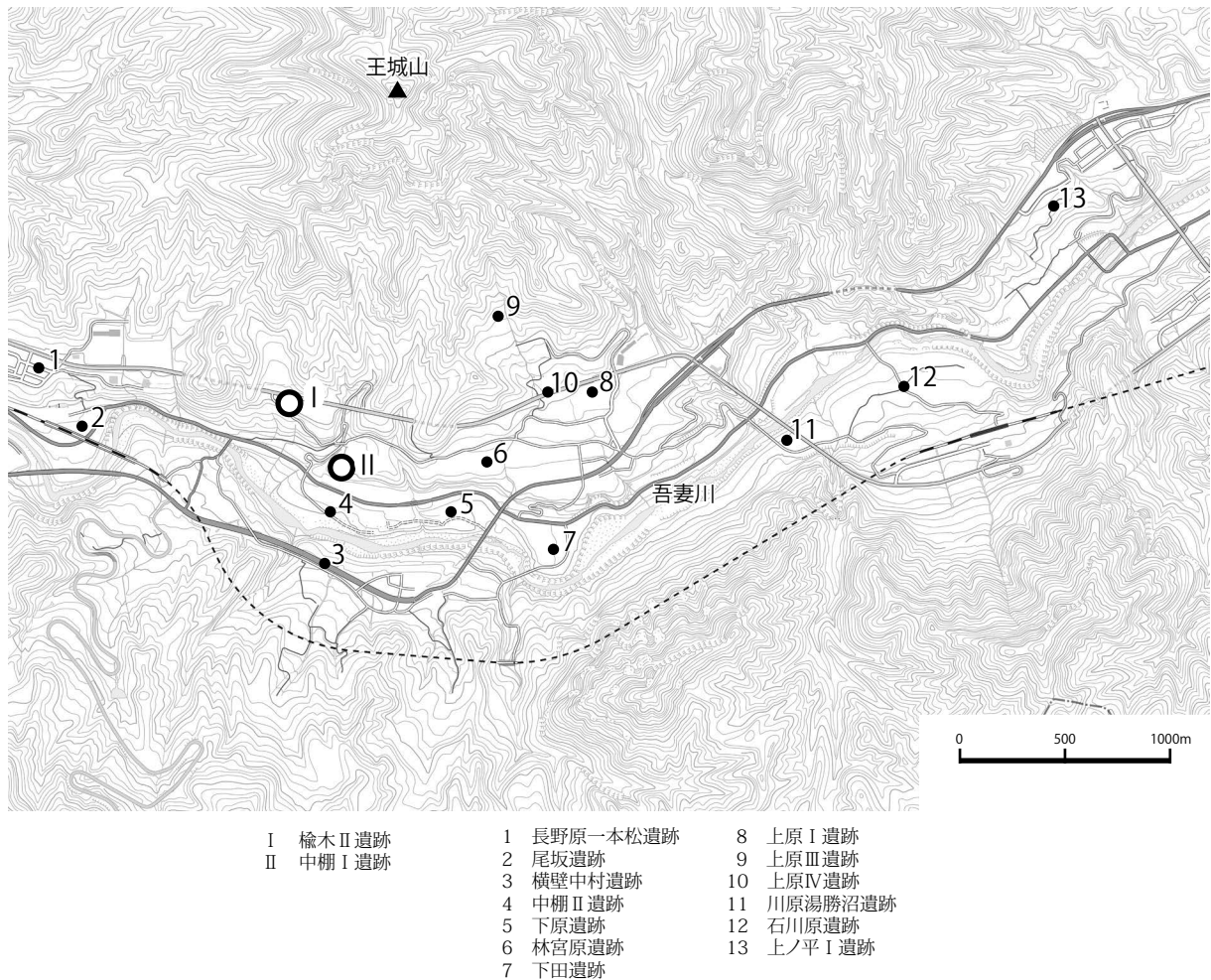


図1 林地区遺跡群とその周辺遺跡

との交流も視野に入れるべきではないかと現段階では考えているが、石組カマド自体は東吾妻地域で5世紀中頃よりみられるためその系統は判然としない。この点については今後の研究の課題としたい。

「三家」の墨書土器について 現在までに「三家」関連墨書土器は7点確認されている（表および図2）。うち、5点が榎木Ⅱ遺跡、2点が中棚Ⅰ遺跡からの出土で、記入数としては計10点である。

このうち、明確に「三家」と記入されたものは、榎木Ⅱ遺跡46号竪穴建物出土の10世紀前半の年代観を有する須恵器碗底部内面に記入された「三家」、中棚Ⅰ遺跡SI01出土の9世紀中葉頃の須恵器碗外面体部および内面底部に記入された「三家」、同SI02出土の9世紀後半の須恵器碗外面底部に記入された「三家」の計3点・計4ヶ所である。

これ以外に、上記の榎木Ⅱ遺跡46号竪穴建物出土の須恵器碗体部外面に倒位で「三」と記されており、榎木Ⅱ遺跡6号焼土出土の10世紀前半の年代観を有する須恵器碗片の体部外面の文字も「三家」だと思われ

る。これらを踏まえると、30号竪穴建物・遺構外出土の10世紀前半の須恵器坏破片に記された「三」も「三家」を意味すると考えられる。46号建物出土の10世紀前半の須恵器坏底部内面の「□家」については、「家」の文字の上にある文字を残画から「三」であるとは言えず、「御」という文字の右側の旁付近の残画と考え、「御家」という釈読が提示されており〔高島2008・2013・2021〕、「三家」に通じると考えられる。

このように、近接する地域から7点の「三家」関連墨書土器が出土している状況を確認した。この「三家」は大化前代に設置された「ミヤケ」を意味している可能性を想定できる。

## 2. ミヤケについて

ミヤケをめぐる議論 ミヤケは、『日本書紀』には「屯倉」「官家」「弥移居」「弥夜気」、『古事記』には「屯家」「屯宅」「三宅」、『播磨国風土記』には「御宅」「三宅」「三家」とあるように、表記は史料によって様々である。ミヤケは大化前代におけるヤマト王権の直轄地、倉を有す

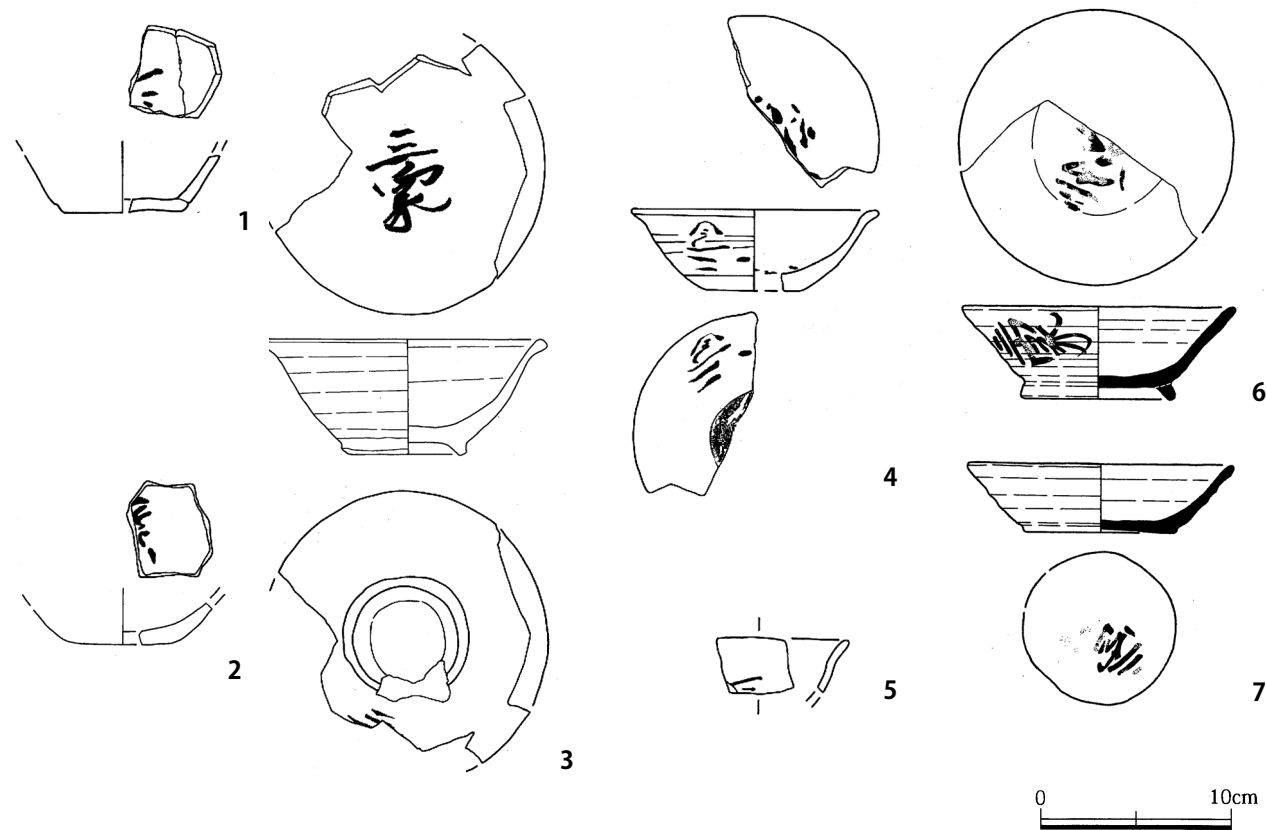


図2 長野原町林地区出土「三家」関連墨書土器一覧

表 長野原町林地区出土「三家」関連墨書土器一覧

	遺跡名	出土遺構	時期	器種	器形	記入部位	方向	釈文	文献	備考
1	楡木Ⅱ	30号竪穴建物	10世紀前半	須恵器	坏	底部内面	—	「三」	1	
2	楡木Ⅱ	46号竪穴建物	10世紀前半	須恵器	坏	体部内面	—	「□家」	1	破片、「御家」カ
3	楡木Ⅱ	46号竪穴建物	10世紀前半	須恵器	碗	底部内面	—	「三家」	1	
4	楡木Ⅱ	6号焼土	10世紀前半	須恵器	坏	体部外面	倒位	「三」	1	
5	楡木Ⅱ	遺構外	10世紀前半	須恵器	坏	底部内面	—	「三」	1	
6	中棚Ⅰ	SI01	9世紀中葉	須恵器	碗	体部外面	倒位	「三」	1	
7	中棚Ⅰ	SI02	9世紀後半	須恵器	坏	外面体部	横	「三家」	2	
						内面底部	—	「三家」		
						外面底部	—	「三家」	2	

文献1 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2008『楡木Ⅱ遺跡（1）平安時代・中近世編 ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書第18集』

文献2 長野原町教育委員会編 2015『林地区遺跡群 水源地域整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書第1集』

るヤケを中心とする農業その他の王権の直接的経営の拠点として説明されることが多いが、ミヤケの理解をめぐるのは、ミヤケの本質を土地所有の問題と捉えるかどうかで大きく二つの説に分かれると整理されている〔堀川 2015〕。

まず、平野邦雄氏はミヤケの構成要素としてタ（田）を基礎とし、「一定の領域を朝廷が排他的に占有するために設定された」とし、「土地に密着した概念」として理解する〔平野 1985〕。また、鎌田元一氏は「ミタを原型とし、田地、館舎・倉庫、耕作民を不可分な要素として成立した概念で、それが屯倉の本義」とし、平野氏と同様、ミヤケの本質をタ（田）と認めながら、「畿内のミタを原型としつつも、全国に拡大される過程で六世紀以後の段階では多様な機能をもって展開」し、外交施設などとする場合でも一定の領域的支配を前提として論じている〔鎌田 2001〕。

一方で館野和己氏は、ミヤケに田地を伴うものもあることを認めつつも、田地を伴わないものもあることから、稲穀を収取するための施設とは限らないこと、ミヤケの用字が様々であることを踏まえるべきとし、ミヤケを「クラ」としての機能に収斂させず、敬意を示す接頭語「ミ」＋「ヤケ」の語であり、王権が各地に設置した「政治的軍事的拠点」と理解する〔館野 1978〕。館野氏は厳密な記紀批判の視点から崇神・仁徳朝の開闢記事を否定し、従来捉えられていた5世紀以前の前期ミヤケの実在を否定した。また、仁藤敦史氏は、5世紀代の大規模倉庫群から考古学的に前期ミヤケの存在を証明することが困難であることなどから、前期ミヤケの存在やミヤケによる領域支配を想定する従来の通説を批判した。そのため6世紀以降の後期ミヤケを主眼に考察を行い、ミヤケの理解の前提となるヤケの一般的性格に注目し、館野氏の説を踏まえたうえでミヤケの本質を特定の人間集団に対する「貢納奉仕の拠点」として捉える。〔仁藤 2012a・2012b〕。また、仁藤氏は東国においては後の国造にミヤケの経営を委任したと考えられるように、ミヤケの経営は在地首長層の協力がなければ不可能であったとする。

このように、ミヤケの本質をめぐる議論については、それを土地所有の問題として捉えて領域的支配を認めるか否かで展開してきたが、現在におけるミヤケの本質的な理解については、平野・鎌田説を批判的に継承した館野・仁藤説が親和的に受け止められているきらいがあり、一定の到達点にあると思われる。

6世紀以降のミヤケ設置の記事は『日本書紀』・『播磨国風土記』に収載され、ミヤケ制の画期を「安閑紀」に

おき、その新設をおおよそ推古朝までに終える。大化改新詔により、天皇の「子代之民」と「屯倉」、ついで皇太子奏により、天皇の「子代入部」、皇子の「御名入部」および「屯倉」の廃止が述べられ、皇太子自ら「入部五百廿四口、屯倉一百八十一所」を献上している（『日本書紀』大化2年〈646〉正月朔条・3月壬午条）。

このように、全国には少なくとも「一百八十一所」のミヤケがあったことから、『日本書紀』に具体的な記載があるミヤケ以外にも数多くのミヤケが全国に存在していたことが確かめられる。そのため、『日本書紀』に記載がないことがミヤケとして認定することを妨げるものではない。例えば、『日本書紀』に記載がないものの、ミヤケの設置がひろく認められている事例としては、後述の上毛野地域の「佐野三家」や、若狭のミヤケが挙げられる。若狭のミヤケについて述べると、藤原宮跡・平城宮跡出土木簡のうち、若狭国小丹生評（遠敷郡）から進上された木簡のなかに「三家首」「三家人」「三宅人」といった氏族がいたことがわかる木簡が複数含まれている。このことから、若狭国小丹生評（遠敷郡）についても『日本書紀』にミヤケが設置された旨の記載はないが、塩あるいは海産物を確保するためのミヤケが設置されていたと考えられている〔狩野 1990〕・〔館野 2015〕。

**上毛野地域のミヤケ** 上毛野地域に関わるミヤケについては、『日本書紀』安閑2年5月庚寅条にみえる「上毛野国緑野屯倉」と、辛巳歳（681年）の銘を持つ山ノ上碑（高崎市山名町）に刻まれた「佐野三家」である。後者については、神亀3年（726）の銘を有する金井沢碑（高崎市根古屋町）に「三家子孫」9名の名前が刻まれており、関連が示唆される。なお、「佐野三家」については『日本書紀』にその記述はみえないが、尾崎喜左雄氏以来「佐野三家」をミヤケとして認めることは学界においてひろく認められている〔尾崎 1980〕。その他の上毛野地域のミヤケについては、唐澤保之氏がミヤケに関わる部民である田部に関連する文献史料・地名・墨書土器を集成のうえ考察を加えている〔唐澤 1991〕。吾妻地域に関する地名では、律令制下の吾妻郡の郷名として『倭名類聚抄』に「大田郷」、『上野国神名帳』の吾妻郡の項に「小不多明神」とみえることをはじめ、東吾妻町厚田・川戸、長野原町川原畑に「太田」「大田」という地名が遺されていることから、他の部民の存在がほとんど知られていない吾妻郡や利根郡にまで田部が分布することが指摘されている。このように、吾妻郡内にミヤケに関わる地名が残されていることから、当地域にミヤケが設置されていた可能性をより強く示唆する。であるから、吾妻地域へのミヤケの設置が『日本書紀』などに

記述されていないことがすなわち吾妻地域にミヤケが設置されていないことを証左するものではなく、十分想定出来得ることだといえる。

もっとも、高島氏が既に注意を払ったように、元来「ミヤケ」という言葉は、首長居館や大規模施設を意味する「ヤケ」という語に尊称である「ミ＝御・美」の語が伴ったものであり、「ミヤケ」という語は元々普通名詞である。そのため、在地首長や地方官人の宅が「ミヤケ」して称された可能性を否定することはできないし、あるいは人名の一部として「三家」の文字が使用されている事例もあるため、「三家」という墨書土器が出土したからといってそれがすなわち大化前代に設置されたミヤケを意味すると解釈することには慎重にならざるを得ない。とはいえ、一可能性として、林地区から出土した「三家」関連墨書土器を吾妻地域へのミヤケの設置、あるいはその遺存地名と考えることは十分できる。

さらに、楡木Ⅱ遺跡 76 号建物からは 10 世紀前半の年代観を有する須恵器坯底部内面に「県」と書かれた墨書土器も出土しているが、これを国造の下の下級組織の県、あるいはその首長の県稲置を指していると解釈し、ミヤケの管理者を意味すると推定することもできる。このことから、当地域へのミヤケの設置を傍証する資料として位置づけられる。

なお、ミヤケが具体的にどのような施設から構成されていたのかその実態は不明と言わざるを得ず、発掘調査遺構をもってミヤケに関わる遺構と認定するのは現段階では慎重になるべきである。林地区において 5 世紀後半から 6 世紀前半の竪穴建物が数棟発見されているが、これをミヤケに関わる何らかの施設と位置づけることは建物構成・年代観の面からみてできない。

### 3. 6 世紀～7 世紀の吾妻地域について

林地区出土の「三家」関連墨書土器が、ヤマト王権の政治的軍事的拠点、あるいは国造の支配領域に存立した部民制的貢納奉仕の拠点である、6 世紀以降に設置された「後期ミヤケ」を意味している可能性を視野に入れた場合、吾妻地域における 6 世紀から 7 世紀にかけての動向が当然気になる。

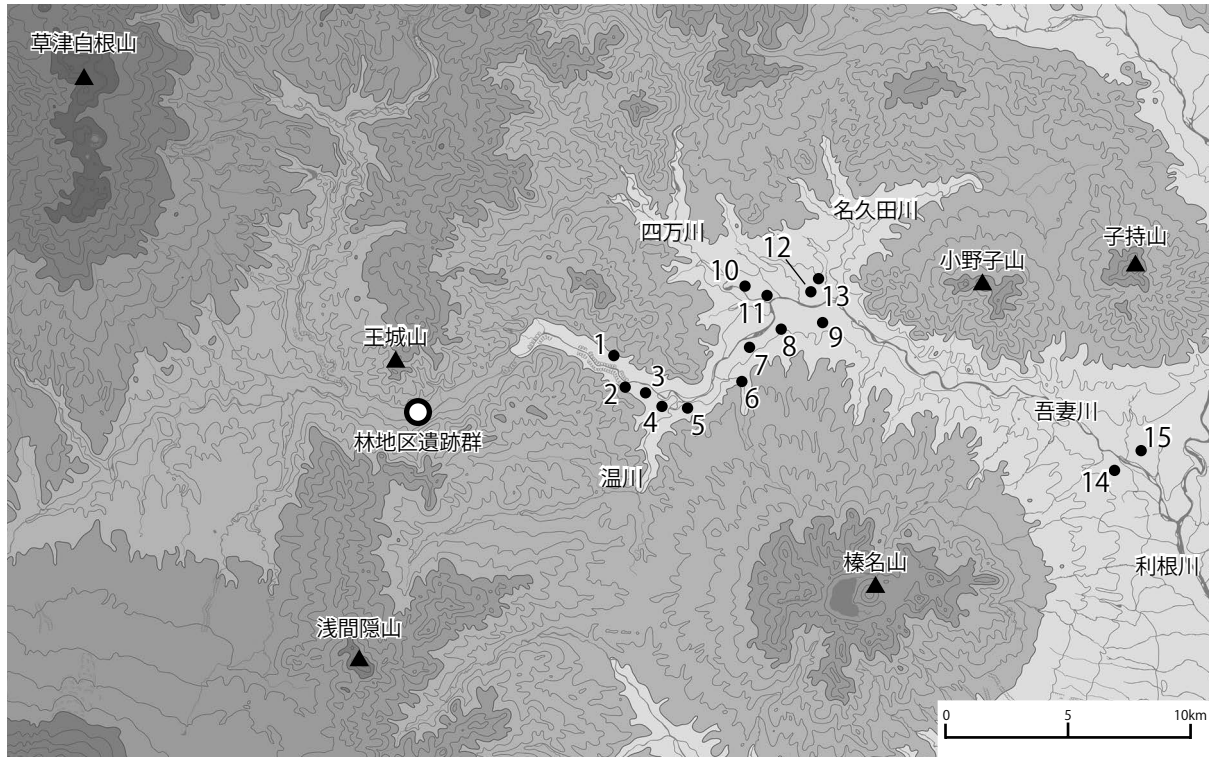
『群馬県古墳総覧』によると、吾妻郡域の古墳は 289 基を数える〔群馬県教育委員会編 2017〕。そのうち吾妻溪谷以西については 7 基のみという僅少さに加えて、それらが古墳であるという確証はなく、古墳のほとんどが東吾妻地域、とりわけ吾妻川をはさんだ中之条盆地に集中している。東吾妻地域において、吾妻川右岸側には四戸・生原・川戸・下郷・金井・岩井・植栗・小泉と古

墳群が続く。左岸側には下之町・寺久保・小川古墳群が形成されており、5 世紀代あるいは 6 世紀代の古墳を先がけとし、7 世紀代に至るまでの経過をたどることが可能である〔中沢 1979〕・〔諸田 1998〕。そこで、本章では当該期の吾妻川流域に形成された古墳を中心に吾妻地域の歴史的展開を追うことにより、「三家」関連墨書土器の歴史的意義を考察したい。

**5 世紀後半以前** まず、5 世紀後半以前の状況について述べておきたい。新井遺跡（東吾妻町厚田）で古墳時代前期に比定される方形周溝墓が検出されているが〔群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2022〕、古墳については明確に当該期以前に比定されているものは存在していない。集落については、東吾妻地域において、川端・天神遺跡（中之条町中之条）では弥生時代から継続して営まれている集落が、四戸遺跡・四戸古墳群（東吾妻町三島）では弥生時代・古墳時代前期から後期にかけての集落が確認されている一方、西吾妻地域では極めて少ない。僅かに前述の長野原町林地区の上原Ⅰ遺跡で確認されている古墳時代前期の竪穴建物に加え、嬬恋村今井東平遺跡で古墳時代前期と想定される甕が出土している事例に限られる。5 世紀後半になると、これまで古墳がみられなかった吾妻地域に僅少ながら古墳が築造されるようになる。具体的には吾妻川左岸の机古墳（東吾妻町岩下円墳）と石の塔古墳（中之条町中之条 円墳 墳丘径約 18m）で竪穴式石槨を有する古墳が発見されている〔尾崎 1971〕・〔杉山 2008〕・〔石島 2018〕。

**6 世紀** 古墳の造営が比較的少なかった吾妻地域が飛躍的展開を遂げるのが、6 世紀、特に初頭から前半期である。上毛野地域の横穴式石室の変遷を論じた右島和夫氏によると、所謂「初期横穴式石室」の成立段階に当たる。上毛野地域、今日の西・中毛地域では 6 世紀初頭ないし前半に横穴式石室が導入されるが、この導入時期については、関東地方においては最も早い段階であり、畿内との密接な関係が想定されている〔右島 1994a・1994b〕、この時期になると、吾妻川流域でも古墳の造営が徐々に本格化する。渋川・吾妻地域の横穴式石室の導入について考察した深澤敦仁氏によると、当地域は、①群馬県地域内では横穴式石室の導入時期が早く、②導入開始段階に採用される横穴式石室は現状ではすべて無袖横穴式石室であり、③導入開始期に変形石室が認められない、といった特徴があるという〔深澤敦仁 2010・2022〕。このようにこの地域の横穴式石室には無袖横穴式石室が使用されるという特徴があるが、その要因としては、「前代からの渡来文化定着による受容」が挙げられている〔右島 2003〕・〔深澤 2010〕・〔若狭





- |         |          |            |
|---------|----------|------------|
| 1 机古墳   | 6 川戸古墳群  | 11 石の塔古墳   |
| 2 唐堀遺跡  | 7 下郷古墳群  | 12 川端・天神遺跡 |
| 3 四戸遺跡  | 8 金井廃寺   | 13 天台瓦窯跡   |
| 4 四戸古墳群 | 9 諏訪塚古墳  | 14 金井遺跡群   |
| 5 新井遺跡  | 10 小川古墳群 | 15 黒井峯遺跡   |

図3 6～7世紀の吾妻地域の主な古墳・遺跡

2015]). 無袖横穴式石室の採用要因を副葬品の面から論じた大谷宏治氏によると、無袖横穴式石室を採用した集団のなかには鍛冶生産や馬生産を行った集団や朝鮮半島を含めた交易活動に従事した集団あるいは朝鮮半島に系譜を持つ集団が含まれていた可能性が高いという。そして、無袖横穴式石室の成立展開にあたって、地域の中核的首長間の交流とは別次元の同一職掌間での技術交流や下位階層間での交流があった可能性を指摘している〔大谷 2010〕。これらの指摘を踏まえると、この地域に古墳を構築した集団は渡来系文化に基づき、鍛冶生産・馬生産を担っていた可能性を想定できる。事実、渋川地域ではかねてより渡来系要素を窺わせる遺構・遺物の存在が指摘されていたが、近年の調査により後述する下郷古墳群 71 号墳（東吾妻町川戸）が積石塚の構造を有し、鉄製素環頭大刀を副葬していることから、吾妻地域でも渡来系要素が認められる古墳が存在することが判明している。

当該期の代表的な古墳として、6 世紀初頭から前半では四戸古墳群（東吾妻町三島）のⅣ号墳、Ⅰ号墳、下郷古墳群 71 号墳、新井遺跡 D3 号墳、続く 6 世紀中頃から後半にかけては四戸Ⅲ号墳・諏訪塚古墳（東吾妻町岩

井）などが挙げられる。そのなかで、吾妻地域の 6 世紀初頭以降の歴史的展開をみていくなかで、四戸古墳群の成立は重要で、6 世紀初頭から 7 世紀中頃にかけて造営される当地域を代表する群集墳として位置づけられる。

四戸古墳群は吾妻川右岸・温川左岸合流域に形成されている平坦な河岸台地上に位置する。台地は東南方向にやや緩い傾斜をもっているが、温川に面した縁辺に 4 基の古墳がほぼ一列に残存している。群馬大学により調査が行われ、東南から北西に向かって、Ⅳ号、Ⅰ号、Ⅱ号、Ⅲ号と呼称されている。このなかでⅣ号墳（円墳 墳丘径約 8m）が最も古く 6 世紀初頭から前半、次いでⅠ号墳（円墳 墳丘径約 10 m）が 6 世紀前半、Ⅲ号墳（円墳 墳丘径約 15m）が 6 世紀後半に位置づけられており、Ⅳ号墳・Ⅰ号墳からは装身具・武器（刀・鍬）・農工具といった豊富な副葬品が出土している〔藤岡 1981〕・〔杉山 2020〕。

温川対岸の新井遺跡では上信自動車道吾妻西バイパスの建設に伴う発掘調査で、古墳が 3 基検出されている。D1 号墳は円墳（墳丘径約 15m）で 5 世紀後半から 6 世紀、D2 号墳は方墳（一辺 17.4m）で 6 世紀前半から中頃、

D3号墳は6世紀代の方墳の可能性が指摘されている〔群馬県埋蔵文化財調査事業団編2022〕。吾妻地域では方墳の出土事例は稀少であるが、これらの方墳は馬生産と渡来系集団との関係で捉えることができるであろう〔右島2003〕。

また、近年調査が行われた下郷古墳群71号墳（楕円形墳 墳丘径約11.6m）は吾妻地域の6世紀初頭の情勢を考えるうえで重要な古墳といえる。この古墳は無袖横穴式石室を有する楕円形墳で積石塚に付け基壇を設けており埴輪を伴う。本古墳は副葬品が充実しており、鉄製素環頭大刀・馬具轡一式・面繫の鉄地金銅張辻金具・琥珀などの玉類が良好に出土しており、畿内あるいは九州と直結した被葬者が想定されている〔東吾妻町教育委員会2016〕。

このように、6世紀に吾妻川流域に古墳が成立する背景として、6世紀初頭頃の榛名山噴火（Hr-FA）により榛名山北東麓の地域が大打撃を受けたことは念頭に置くべきであろう〔右島2020〕。近年当地域に豊富な見識をもたらした金井遺跡群は、大規模な馬生産に関わる拠点集落であることが明らかになった。その打撃から免れた対岸の黒井峯遺跡は6世紀初頭から前半にかけて飛躍的な展開を遂げることから、馬生産の拠点が榛名山北東麓から子持山南麓に移動したと推定され、さらにはちょうどその頃、利根川上流域や吾妻川流域でも古墳の造営が本格化するのである。平安期の史料になるが、『延喜式』左右馬寮御牧条には上野国の御牧として9ヶ所が挙げられており、そのうちに「市代牧」とみえる。この「市代牧」は現在の中之条町市城、東吾妻町新巻・奥田付近などを比定する考え方が有力で〔前澤1995〕、吾妻郡に牧があったと推定される。近年の吾妻地域における豊富な発掘調査により、このような郡内における馬生産が6世紀初頭から前半に遡る可能性が十分に考えられる。

ところで、既述のように長野原町域における古墳時代の遺構は著しく僅少であるが、林地区で当該期に属する竪穴建物が数棟確認されている。東吾妻地域で古墳造営が本格化した頃、林地区に当該期の竪穴建物が数棟のみであっても確認されていることは、吾妻地域の東西交通を考えるうえで見逃せない。既に述べたように、これをミヤケに関わる何らかの施設と捉えることは決してできないが、当地域が上毛野地域から烏居峠を経てシナノ/科野に至る交通路上に位置していることから、何らかの背景があり築かれた建物であることを考慮に入れておく必要がある。

**7世紀** 終末期になると、両袖型横穴式石室を有す

る古墳が一般的になる。当該期の古墳としては、まず四戸古墳群のうち両袖型横穴式石室を有するⅡ号墳（円墳 墳丘径約10.6m）が7世紀前半の古墳として挙げられる。また、近年行われた上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う発掘調査で、新たに四戸古墳群からいずれも両袖型横穴式石室を持つ古墳が3基発見された。1号墳が6世紀後半、2号墳が7世紀前半、3号墳が7世紀中頃に比定されている。このうち1号墳から発見された埴輪は藤岡産であることが解明されており当地域との結びつきが示唆される〔群馬県埋蔵文化財調査事業団編2020〕。また、唐堀遺跡では7世紀前半の両袖型横穴式石室を有する円墳（墳丘径約18m）が発見されており、現状では調査が実施された吾妻地川右岸最西の古墳である〔群馬県埋蔵文化財調査事業団編2021〕。このほか、川戸古墳群の原町42号墳（東吾妻町川戸）には玄門柱石を持つ自然石乱石積による両袖型横穴式石室が用いられており、終末期の特徴が現出していると位置づけられている〔諸田1998〕。

7世紀の吾妻地域の動向について特筆されるのが、金井廃寺（東吾妻町金井）の造立である。上毛野地域でも僅少な白鳳期に属する寺院跡で、伽藍配置は詳らかではないが、南北約160m、東西約110mの規模の寺域と推定され、7世紀後半に創建され9世紀前半には廃絶したと考えられている。創建段階に用いられた1型単弁八葉軒丸瓦は上植木廃寺の創建段階瓦の直後続種であり、同一造瓦組織に基づく所産であると考えられている。そのほか瓦の製作地域の主体は不明瞭であるが、わずかながら対岸の中之条窯跡群の天代瓦窯跡（中之条町伊勢町）と碓氷郡の秋間窯跡群（安中市下秋間・中秋間）からの供給がみられる〔吾妻町教育委員会1979〕。

さらに最近では、金井廃寺から南西に1.2kmの下郷古墳群で7世紀後半から8世紀初頭を中心とした複数の掘立柱建物と塀・門が検出されており、吾妻郡家やその前身の評家に関わるとみる意見もある〔群馬県埋蔵文化財調査事業団編2014〕。なお、対岸の天台瓦窯跡は8世紀前半から中頃にかけて操業し、その瓦は官衙などに供給されたと考えられている〔大江1986〕。また、長元3年（1030）頃に作成された「上野国交替実録帳」こと不和解由状案には「長田院」・「伊参院」とみえるが、天神遺跡から多数の掘立柱建物と総柱式建物からなる奈良・平安時代の遺構群が検出されており、これを伊参郷に設置された郷倉院とみる意見も示されている〔前澤2021〕。概してこのような経緯を経て、吾妻地域では律令体制下の吾妻郡が成立するのである。

以上雑駁ではあるが、主に6世紀から7世紀の吾妻



地域の歴史的展開を概観し、6世紀初頭に馬生産の担い手として台頭してきた地域に横穴式石室が導入されたこと、7世紀後半頃には白鳳期の寺院である金井廃寺が造立されたことから、山間部にありながら先進的な文化を取り入れた地域であることを述べた。6世紀初頭以降の飛躍的な地域展開の背景としてこの地に渡来系集団が存在していたことが挙げられるが、既に専論があるとおりのミヤケの経営には渡来系集団が深く関与していることが指摘されており〔田中 2002〕、ミヤケが列島各地に拡大した6世紀末から7世紀にかけて吾妻地域にもミヤケが設置されたとすれば、その経営にも渡来系集団が関与していることは十分想定できる。さらにいえば、こうした先進的な知識・技術を有する渡来系集団が地域経営に関与したことにより、7世紀後半頃に金井廃寺のような白鳳寺院を要するに至ったと考えられるのである。

## おわりに

小稿では、長野原町林地区から出土した「三家」関連墨書土器を手がかりに6世紀から7世紀の吾妻地域の動向を考察することを試みた。吾妻地域は6世紀初頭から飛躍的な地域展開を遂げるが、その理由として当地域が渋川地域の動向と関連して、6世紀初頭以降に馬生産の担い手として台頭してきたことが挙げられる。当該期は上毛野地域における横穴式石室の導入期に当たり、吾妻地域では無袖横穴式石室が集中的に取り入れられるが、このような石室形態は渡来系集団との関わりを示す可能性があり、この地域が渡来系集団を取り込みながら展開していったことを示唆するといえる。この点は近年の豊富な発掘調査事例により渡来系要素を窺わせる遺構・遺物が出土していることから裏づけられる。このように吾妻地域は6世紀初頭以降、渡来系要素が色濃くみえる地域であることが近年明らかになりつつあるが、ミヤケの経営には渡来系集団が深く関与していた可能性も考えられる。こうした吾妻地域の動向に際して5世紀末～6世紀初頭の榛名山大噴火（Hr-FA）で壊滅的な被害を受けた榛名山北東麓との関連に目を配る必要がある。また7世紀後半頃に白鳳期の本格的寺院と考えられる金井廃寺が造立されたように、6世紀から7世紀にかけて上毛野地域において山間部にありながら先進的な地域であったといえる。このように6世紀から7世紀にかけての吾妻地域の動向に目を向けることで当地域にミヤケが設置された可能性はますます高くなったと考えられる。既に述べたように、墨書土器に表れる「三家」の語が地方官人や在地首長の居宅を指す「ミヤケ」として記された可能性を否定することはできないし、あるいは

は人名の一部として「三家」の文字が使用されている事例もあるため、「三家」関連墨書がすなわち大化前代に設置されたミヤケを意味すると解釈することには慎重にならざるを得ない。とはいえ、ミヤケが列島各地に拡大した6世紀末から7世紀にかけて、上毛野とシナノ/科野を結ぶ主要な東西交通路上に位置する当地域にミヤケが設置された可能性は十分考えられよう。出土地点や出土遺構を直接的にミヤケ関連施設として結びつけることは決してできないが、「三家」関連墨書土器は、大化前代の政治的軍事的拠点ないし貢納奉仕の拠点であるミヤケの遺称地を示すものとして、9世紀中葉・後半から10世紀前半にかけて当地域において文字として記されたものと解釈し得る資料なのである。

## 引用・参考文献

- 尾崎喜左雄 1971「四戸古墳群及び机古墳発掘調査報告」（岩島村誌編集委員会編『岩島村誌』）
- 尾崎喜左雄 1980『上野三碑の研究』尾崎先生著作刊行会
- 大江正行 1986「天台瓦窯跡」（群馬県史編さん委員会編『群馬県史資料編 2』群馬県）
- 大谷宏治 2010「副葬品からみた無袖石室の位相―東海～関東を中心に―」（土生田純之編『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣）
- 狩野 久 1990『御食国と膳氏』（『日本古代の国家と都城』東京大学出版会、初出 1970）
- 鎌田元一 2001「屯倉制の展開」（『律令公民制の研究』塙書房、初出 1993）
- 唐澤保之 1991「古代群馬におけるミヤケの一考察―「田部」関係地名に着目して―」（『群馬県立歴史博物館紀要』12）
- 杉山秀宏 2008「吾妻地区最古の古墳―石ノ塔古墳について―」（『群馬地域文化』30）
- 杉山秀宏 2020「四戸古墳群について」（『研究紀要』38、群馬県埋蔵文化財調査事業団）
- 関口功一 2013「古代吾妻郡の組成と性格」（『古代上毛野の地勢と信仰』岩田書院）
- 高島英之 2008「楡木Ⅱ遺跡出土の墨書土器」（群馬県埋蔵文化財調査事業団編『楡木Ⅱ遺跡（1）平安時代・中近世編 ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 18 集』）
- 高島英之 2013「山国の出土文字資料―上野国吾妻郡出土墨書土器から―」（鈴木靖民・吉村武彦・加藤友康編『古代山国の交通と社会』八木書店）
- 高島英之 2021「墨書・刻書土器の動向から見た古代上野国吾妻郡の歴史的展開について」（『研究紀要』39、群馬県埋蔵文化財調査事業団）

高林真人 2015「本調査における出土遺物および竪穴住居跡の変遷」(長野原町教育委員会編『林地区遺跡群』)

館野和己 1978「屯倉制の成立」『日本史研究』190

館野和己 2015「木簡から読む古代のふくい―新たに報告された木簡を中心に―」『福井県文書館研究紀要』12

田中史生 2002「ミヤケの渡来人と地域社会」『日本歴史』646

富田孝彦 2011「調査の成果と課題」(長野原町教育委員会編『林宮原遺跡Ⅷ』)

中沢 悟 1979「中之条盆地における古墳の様相」(吾妻町教育委員会編『金井廃寺遺跡 町道 4-83 号線に伴う発掘調査』)

仁藤敦史 2012a「古代王権とミヤケ制」(『古代王権と支配構造』吉川弘文館、初出 2005)

仁藤敦史 2012b「古代王権と「後期ミヤケ」」(『古代王権と支配構造』吉川弘文館、初出 2009)

平野邦雄 1985「六世紀の国家組織」(『大化前代政治過程の研究』吉川弘文館)

深澤敦仁 2010「上野」(土生田純之編『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣)

深澤敦仁 2022「横穴式石室から窺う 6 世紀前半の群馬県渋川エリアのポテンシャル」(土生田純之先生退職記念事業会『人・墓・社会―日本考古学から東アジア考古学へ―』雄山閣)

藤岡一雄 1981「四戸古墳群」(群馬県史編さん委員会編『群馬県史資料編 3』群馬県)

堀川徹 2015「ミヤケ制研究の射程―研究史の到達点と課題―」『史叢』92

松本浩一 1981「石の塔古墳」(群馬県史編さん委員会編『群馬県史資料編 3』、群馬県)

前澤和之 1995「上野国の馬と牧」(高橋富雄編『馬の文化叢書第 2 巻 古代』馬事文化財団、初出 1991)

前澤和之 2021「『上野国交替実録帳』と地方政治」(『上野国交替実録帳と古代社会』同成社、初出 1991)

右島和夫 1994a「上野の初期横穴式石室の研究」(『東国古墳時代の研究』学生社、初出 1983)

右島和夫 1994b「上野国における横穴式石室の変遷」(『東国古墳時代の研究』学生社)

右島和夫 2003「上野地域における方墳の系譜と馬一岩下清水古墳群をめぐる一」(土生田純之編『古墳時代東国における渡来

系文化の受容と展開』専修大学文学部)

右島和夫 2018「机古墳」(『群馬の古墳物語』下巻、上毛新聞社)

右島和夫 2020「四戸の古墳群の成立背景」(群馬県埋蔵文化財調査事業団編『四戸の古墳群 上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』)

諸田康成 1998「吾妻郡」(群馬県古墳時代研究会『群馬県内の横穴式石室 I (西毛編)』)

若狭 徹 2015『東国から読み解く古墳時代』吉川弘文館

吾妻町教育委員会編 1979『金井廃寺遺跡 町道 4-83 号線に伴う発掘調査』

群馬県教育委員会編 2017『群馬県古墳総覧』

群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2008『楡木Ⅱ遺跡(1) 平安時代・中近世編 ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 18 集』

群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2014『下郷古墳群 (都) 3.4.5 原町駅南口線外 1 線社会資本整備総合交付金(活力基盤)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2020『四戸の古墳群 上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2021『唐堀遺跡(1) ―古墳時代以降編― 上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2022『新井遺跡 上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

長野原町教育委員会編 1990『長野原町の遺跡 町内遺跡詳細分布調査報告書』

長野原町教育委員会編 2015『林地区遺跡群 水源地域整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 1 集』

東吾妻町教育委員会編 2016『下郷古墳群 71 号墳』

〔付記〕本稿の作成に際し、高島英之氏から多大なるご教示を得た。この場を借りて御礼申し上げる。

(たかはし とむ 長野原町やんば天明泥流ミュージアム学芸員)